おーい図書館

No. 158
発行 おーい図書館
代表 青木 和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL. 047-311-0886

市民講座
「図書館が日本を救う
～公立図書館の可能性と課題～」
主催　松戸市立図書館
講師　常世田 良氏

寺澤 美希

2月9日(土)に行われた講演会に参加し、大変感銘を受けました。講師の常世田先生は、私たちにもわかりやすい言葉で、社会背景や世界の図書館、行政の事情、これからの街に必要な図書館のあり方をお話し下さり、とても密度の濃い2時間でした。このような講座を聞けた事を、とても嬉しく思います。ありがとうございます！

様々なお話から、以下の3つが印象的でした。

○娯楽提供型から、問題解決型の図書館へ。
○財政状況と図書館の情報サービスの質は関係ない。
○これからの多様性の社会、自己責任を問われる社会において、情報提供は担保されなければいけない。それは図書館の役割である。

特に、ビジネス支援など専門分野の問題を解決する場所であるのが大切で、ベストセラーばかり置いている場合ではない。情報提供に「貸出し」「返却」は、ないのではないか。図書館の本性は「本」ではない、ということを図書館のプロ中のプロから聞いたのが衝撃でした！

私が中学生の頃、学校の先生が「図書館は公共施設なので、みんながよく読むような本がたくさん置いてある所で、仕事の本など、個人の利益になる情報の本はあまり置いてありません」と言っていたのですが、それはもうとっくの過去のことなのですね。

たしかに、近くの金町の図書館には、企業向けのビジネス相談や講座のチラシが置いてありました。大人向けの企画が多かった事を記憶しています。流山の森の図書館や我孫子の図書館も、文化の発信施設としての意気込みを感じます。

松戸の図書館は、現在は近隣の地域の中で出遅れてしまっていると感じますが、昭和50年頃は、移動図書館車みどり号など、全国で

も先駆的な取り組みだったと聞いています。母も私も、みどり号を毎週楽しみにしていました。そのような素地がある松戸なのですから、是非「先駆的な図書館のまち」として、満を持して返り咲いてほしいです。

今回の講座で、常世田先生のお話と、もうひとつ印象に残ったのが、最後のスタッフの方の挨拶です。現場の方の「変えたい！」という切実な想いが伝わってきました。これは、市民として、とても心強く思いました。松戸市HPや、いろいろな所から、今、市長さんが図書館の改革に熱心であること、講員の方々にも取り組みをなさっている方がいる事を聞きます。

常世田先生のような方がたまたま松戸に住んでいらっしゃることも、運が良いとしか思えませんし図書館の改革計画が少しでも進んでいるようでしたら、ぜひ今回の講座で話されていたような図書館を実現してほしいです。

これからの松戸の図書館に期待しております。すばらしい講座をありがとうございました。

遠藤　翔

世知辛い世の中になった。それは猫も杓子も「自己判断自己責任」といわれる時代になっており、日本がこれまで大事にしてきた共存共栄の精神が無くなっているからなのかもしれない。がしかし、この点に不満を述べても状況は一向に改善しない。一見厳しいと考えられる「自己判断自己責任」の時代を、十分に、満足に、楽しく生きていくために必要なものは何か？今回の講演では、それは『情報』であり、その情報を市民に提供することが出来るのが『図書館』である、ということを学ぶことができた。

図書館というと『本を貸すところ』をイメージしがちであるが、提供しているのは情報そのものであり、本の貸出しというのは、情報提供の一手段にすぎないということもわかった。さらに図書館に求められる機能は、単一の情報を提供するのではなく、本であれば一冊ではなく複数。本だけではなく、悩みに応じた相談窓口の案内など、図書館の持つあらゆるネットワークを使って総合的に情報を提供することが、目指す方向として望ましいのではないか、ということも、講演の一つのテーマになっていた。

さて、情報提供にはハードとソフトの双方が大事である。ハードとは、図書館の建物そのものや資料そのものを指す。ソフトとは、司書（や、そこで働くスタッフ。

以下、司書で統一）のことである。松戸市の図書館では、双方がまだまだ足りないように一市民として感じているが、本講演では、特にソフト面での重要性に重きを置いているように感じた。

それはなぜか？

一つには、職員のやる気や工夫次第で、追加のコストをかけずとも、松戸市の図書館は実践できることがまだまだある、という常世田さんの強いメッセージなのではないか？

司書を充実させるということは、単に人を増やせということではない。例えば、インフルエンザが流行している現在であれば、インフルエンザについての本や、予防法に関するコーナーを入り口に設ける。また、法律の相談がきたら、自分では手に負えないが、どこにアクセスすれば、適切な情報を提供できるのかを、職員一人一人が理解しておく。それだけで、市民にとっての図書館の利便性は大幅に向上する。ハードについて全く手を付けずとも（もちろん、資料が増えて、施設が綺麗になれば、市民としては嬉しいが）松戸市の図書館がもっと良くなる。そのような可能性や潜在能力が松戸市にはある。そのように、プラス思考に考えたい。

「自己判断自己責任」というと、否定的・消極的な印象で使われることが多い。しかし、自己判断自己責任で物事を決定していけるということは、自分自身が人生の当事者として自由に動き決定できるということである。そのための情報機関として、図書館をこれまで以上に活用し、人生をより豊かにしていきたい。そんな前向きな気持ちになれる、熱い講演であった。

前田　奈津希

図書館と聞いて、どんなイメージを持つだろうか。

私は、「子どもやお年寄りなどが行く場所」「暇な人が娯楽を求めて行く場所」「本は借りずに、持ち込んだ用具で勉強する場所」といったイメージを持っていた。大学生になって「学問的な研究をする場所」というイメージが加わったものの、基本的な考えは変わることがなかった。

ところが、この度2月9日に行われた市民講座「図書館が日本を救う」では、これまでの私がイメージすることのできなかった「働く世代」にこそ図書館が必要であることが説かれていた。そして、単なる「本」ではなく「情報」を扱うのが図書館だというのだ。

どういうことだろうか。

そもそも私は、「必要な本なんて、自分で見つけて購入しさえす

れば良いだろう」と考えていた。これが間違いで、本というのは年間8万冊も出版されるし、その時点であまり売れない本というのは、「返本制度」によって書店から姿を消してしまうそうだ。これでは書店から個人が本当に自分にとって必要な本を見つけ出し、手にとることすら困難である。一方の図書館は、優秀な司書の選書によって少しずつ新陳代謝を繰り返しながら、常に最新の情報を取り入れ、その秩序を崩すことなく私達を待っているのだ。

書店で本を購入するのと図書館と、どちらが良い悪いではなく、「自己判断自己責任」型社会において、必要な情報がどこに行けば手に入るのかを知っていることこそが大切なのだと感じた。

また、今回の講演で図書館の可能性を感じずにはいられなかった。事例として、主婦が自力で暴力団と裁判で闘ったエピソードが挙げられる。図書館に通い詰め、法律を一から学ぶ主婦を途中から学生たちがサポートするようになり、更には味方になってくれる弁護士も現れたというところに、「公共圏」としての図書館の可能性を感じた。

「自己判断自己責任」型社会においては、情報の在り処を知っていること、その中から情報を取捨選択する能力が問われる。情報が自由に行き来する図書館を、今後大いに活用していきたい、そんな前向きな気持ちになれる講演会だった。

渡部　裕

「壮大なタイトル」が、つけられた本講演は、常世田さんのタイトル紹介から始まった。会場には「クスッ」という微笑が　あふれた。一見すると大仰なタイトルと思ってしまうのだが、実はそれは「図書館の本当の役割」を知らないからなのかも知れない。

常世田さんは、「よくある反応ですが(笑)、本当に図書館は日本を救うんです」と続けた。最高のツカミだと思った。

まず、常世田さんは、図書館で本を「借りる・返す」という表現に疑問を呈していた。普段何気なく図書館を利用している私は、この表現を何も不思議に思わなかった。しかし、よくよく考えてみると「情報」は、手元に残るため、この表現は正しくない。いかに「図書館は本を借りる場所」というイメージが刷り込まれているかを思い知った。

また、図書館員のステレオタイプとして、「本が好きだけど、人と話すのが苦手だから図書館で働く」という人物像を紹介されていた。

「本を貸すだけの場所」としては、それで問題ないのかもしれないが、「課題解決型」の図書館では、むしろ「人と関わることが好き」な人材が必要とされるのかもしれない。現に、昨年伺った浦安市中央図書館では、積極的に来館者とコミュニケーションをとる職員の方が多かったと記憶している。

事例紹介では、「ビジネス支援」を重点的に行っている鳥取県立図書館のほか、各地の図書館の取り組みもVTRで拝見した。ここで感じたのは、限られた予算で図書館に必要とされているのは「○○市は、ロロな街で、△△な市民が多い。よって、こういった図書館が必要だ」という分析を踏まえた図書館運営だ。ただ人気のある本を集めたり、蔵書のバランスをとっているだけでは、エッジの効いた運営はできない。残念ながら現時点では、松戸市の図書館にこれといった「特徴」を感じたことは、ない。

松戸市の特徴を考えれば、「ビジネス支援」はヒントになるテーマではないか。サラリーマンのベッドタウンであること、工業・農業が盛んであること、NPO団体の活動が活発であること、などがその理由だ。

配布資料の中で印象に残ったのは、やはり「暴力団と戦う主婦」の話だった。抗争の流れ弾で娘を失ったお母さんが、図書館で法律を調べ、組長を相手取って民事訴訟を起こし勝訴した。常世田さんの「図書館は日本を救う」という言葉の一端を見たような事例だった。

最後に、職員の方が総括で、松戸市立図書館の現状が市民から求められているものではない事を認めた上で、「市民の皆さんから、どういった図書館が欲しいかという声を聴かせてほしい」と仰ったことが記憶に焼きついた。

議会を傍聴しているときなど、行政職員の、魂を感じない、無駄なく体裁の整った話を聞くことは多い。しかし、彼女の言葉には魂があった。

私も、松戸に求められる図書館像をともに考え、伝えていきたい。

青木　和子

常世田さんは、「図書館が日本を救う」を「情報が日本を救う」と言い換えてもよい、と仰って、講演を始められました。

以下、当日のレジュメ項目と内容抄録を。

○「自己判断自己責任」型社会への移行

○市民の情報環境の変化と従来の情報システムの限界

○「情報」なき「自己判断」の危険。
○「課題」の構造と公立図書館特有の機能
○生涯学習、「情報リテラシー」、「自立」
○地域振興と図書館の新しいサービス（課題解決型サービス）
○被災地への遠隔地の図書館からの情報提供
○先進国との比較

市民が必要としている体系的網羅的な多様な情報を質的量的に入手するには、これまでのマスコミ・出版流通・インターネットでは限界がある。個人の力だけでは難しい。多様な情報を提供できる、質の高い図書館が必要な時代となっている。それは、地方の図書館にこそ求められている。

情報弱者には、何が必要かを聞き出して提供し、情報強者には、強者にも探せないものを提供する図書館であってほしい。

図書館の目的は、市民の精神的・社会的・経済的な自立を手助けすることである。「本を貸す」ことはそのための手段であり、本来の目的は「本の中身を提供」することである。

課題解決型の図書館サービスとしては、地元企業・商店や地元農林漁業関係者への情報サービスや勤労者の再教育などのビジネス支援サービス、地域の医療・介護などに関する医療健康情報サービス、地域への法律情報サービス、行政各部署や議員への情報提供、市民への行政情報提供、乳幼児・児童・青少年の言語能力・論理的思考能力の育成促進に結びつくサービスなどが注目される。

このような「課題解決型」図書館は、先進国では当たり前のこととされている。

図書館の本質は「ネットワーク」であり、それを駆使するためには優秀な司書の存在が不可欠である。

松戸市立図書館主催で、初めて開催された常世田さんの講演会は、話し手・聞き手ともに、熱気あふれる充実した会でした。

何より嬉しく、心に残ったことは、図書館員の方々の強い意欲が感じられたことです。今後の松戸市立図書館の実践に大きな期待を抱きながら、会場を後にすることができました。

常世田さん、図書館の方々、どうもありがとうございました！

そして、早速感想を寄せて下さった皆様、本当にありがとうございました！このような若い方々がずっと住み続けたくなる魅力的な松戸市であるためにも、素晴しい図書館を、ぜひ実現させたいと願っております。